武德成業

四十九

内閣文庫
和書 類
一五二五一 號
六三 冊
一五〇函
四 架

内閣文庫
番號	和 15251	
冊數	63(49)	
函號	150	12

国立公文書館
National Archives of Japan

武德成業巻之四十九

伯耆守加藤正脩編

日本政府図書

天元實記
慶長七年正月六日内府公従一位ニ御昇進於拖
同月十九日御上京ニして 内府公江戸御首途於拖
此由あり

武徳大成
此時前田肥前守利長江戸ニ来リ 台徳公ニ謁シ黄金
百枚銀千枚時服百領正宗ノ脇差ヲ献ス 台徳公黄金
百枚馬鷹并藤四郎ノ脇差ヲ玉フ
二月朔日井伊兵部少輔直政卒ス年四十二長男右近大夫直

内閣文庫
淺草文庫

勝父ノ封ヲ襲ク次男掃部頭直孝幼ヨリ　神君
台徳公ヘ仕ヘ奉ル後ニ直勝ニ代リテ嫡家トナル
明良洪範
井伊直政直親ノ嫡先祖ハ源三位頼政ノ臣井伊早太其后新
田義興ト兇ヲ共ニセシ井伊弾正皆先祖親族ニノ遠江井伊
ノ御主也數百年來源家累代ノ家臣也直政カ二歳ノ時父肥
後守死亡ノ直親カ孀婦木俣氏ノ後妻ト成故継父ノ名字ヲ
継木俣ト始ノ称シケル其后天正三年正月濱松　神君
放鷹シ玉時直政十五歳被召出井伊谷ヲ被下正月十五日十
五歳ニテ被召出天正八年十二月御先手ノ大將ト成四万石

ヲ賜リ甲州ノ勇士七十余人関東名有勇士四十三人合テ百
二十騎ヲ撰テ直政部属トシ兵器皆一色ノ赤色ヲ用ユヘシ
ト命セラル將師ノ畧有故ニ恩遇諸將ニ超タリ
又曰直親カ孀婦松下源太郎ニ嫁ス源太郎井伊万千代直
政ヲ養共云両説虚實ヲ不知ト云云追テ考ヘシ
慶長七年二月朔日直政卒去于時四十二歳嫡子直勝家ヲ継
ト云ヘ共多病元和元年井伊直孝ニ佐和山ヲ賜フ二月十リ
駿府ニ召汝兄直勝疾病有其任ニタヱス汝直政カ嗣ト成テ
軍務ヲ掌ヘシ直孝拜辞再三也然共嚴命有テ免シ不玉佐和

山食菜二十万石直孝ニ賜ル上野安中城直孝旧領三万石ヲ
直勝ニ賜其病ヲ養ハシム今兵部少家也
直孝ハ直政ノ次男元和元年嫡家トナル佐和山入部ノ時家
臣岡本半助信就諫テ云法令多ハ罪人多制禁少レハ犯ス者
ノナシ今度大変ノ后泰平ノ始也御入部是ヲ可被思召云云
直孝入部仕置倹約ト勘略トハ似タル物ノヤウニテ大ナル
違也凡物毎ヲ約カニ奢ヲ止テ禮儀ヲ正ク制度ノ行ルヽハ
倹約ニシテ無益ノ費ヲセサル事ナレハ和漢是ヲ善道ト云ニ
ヤ勘略ハ行ヘキ禮節モ省テ不苦事ヲ止ルヨリ其格式ニ過
テ物ヲ略ス是モ又奢侈放埒ノ妄ル家ニクラフレハ善道也
直孝入部家中衆ヲ晴レト美ヲ尽迎ニ出ケル所ニ直孝木綿
袷道服兼テ用意モタセタルヲ家司物頭ニ与ヘテ申レケル
ハ古ハ具足計ヲ着シカヽル身廣モノハ不着シ今ハ天下泰
平ナレハ各是ヲ着シテ悠々ト休息スヘシト也綺羅ヲ盡テ
出タルモノ直孝ノ思惑思外也ト各自己ヲ顧テ面々勘略シ
ケリ家中廻ノ節家作悪ク能馬ヲ引立ルヲ乗入湯洗場ニテ
身上尋ルニ百五十石何某ト云ヘリ武具馬具嗜志有ヲ聞テ
一倍ノ加恩アリ當時山崎甲斐守カ家中ノ家居宜馬鞍ナトハ

成間鋪ト被申シ江戸屋鋪ニ小荷駄百疋ツヽヲ置キ日光御
上洛ノ節ニ兼テ事ノ不滞ヤウニセラレシト也　竹千
代君八才ノ御時四月日光御社参ノ時モ別ニ握飯ヲ持セス
黒米飯ヲ其驛々ニノ食ヌ供奉シケリ古ヘ　神君御鷹
狩ノ時品川ニテハ蛤八王寺辺ニテハ芋ヤ蕨ヲ被召上常ノ
上意身ヲ摘テ人ノ心ニ止トノ義直孝第一ニ尊信シケルト
ナリ

又云井伊家ハ加増褒美申渡スニ此已後又勤ニ依テ加恩
褒賞有ヘシ直々被仰渡是功ヲ不盗ノ事也

井伊直孝一本道具ノ説古ヘ御上洛ノ時彦根御旅舘ノ所余
リ御馳走ノ志故ニ家中妻子在郷ヘ退ラレケル此㕝上聞ニ
達ケレハ御旅舘相止ミ直ニ大津ヘ御出ヲ聞直孝大ニ迷惑
シテ京都ニテ閉門遠慮シテ御沙汰ヲ伺直孝日光御上洛ノ
時妻子ハ屋鋪裏小屋掛置事知ナカラ在郷ヘ退シ㕝御不審
ヲ蒙リ京都ヨリ御下向ノ時如何可仕哉ト酒井忠勝ヘ議セ
ラレケレハ京都ニ遠慮致シテ在城有テモ甚宜カルヘシ道
中一本道具ニテ密ニ御跡ヨリ下リ申サレ然ヘシヤト申遣
故一已ニテ究ン㕝如何ト相談ニ及タル由謹敬ノ下リケル

三島ニテ直孝ハ下ル哉ト御尋ノ處ニ道中士二三人召連遊
駅謹敬ノ御行列ノ跡ニ付供奉仕ルノ由ヲ申上ル早々召サ
セラレ御詞掛夫ヨリ直孝一代ハ在國御暇出ス其后五万石
ノ御加恩ハ被下然トモ鎗ハ一本持セケルト也

續閑談

佐和山にて時鐘の事　直孝彦根にて時付候ハ昔ゟ
関成直候へく時鐘つき無別被付させられ候支ハ直孝
江戸の御当中し夢にては其子細も無別付るまゝ
うとまハ京都を人候ニ付て家中し其思候て京都
へ条候よし申仰候度ちく西ニ無別被付させらる候
よしニ仕候

直孝御国にて公事其他頃より公事一度無之候ハ其く
御他に内にて公事仕出し候その訴無之ハ先ゟ内従
まて能く吟味成仕り百姓にも候儀ニ相違候ハゝ
一向其ニ付させ候て非公事中掛候方と別法付
よこの時付と前座御内へ罷く時付候上ハ四十年以
前より御内にて公事中何事も仕候ハ別様非公事
申ける方成様にかねら来候ハ其以後ハ堅く御他
まて公事仕候事無之よし取候

他流と出合し事ハ十分此方之利なくてハ不叶
ものなり間合よく〳〵此方の身を能得て後に勝
と兼て常ニ身の在他流との勝負もさしてなき様に
及申候

当流修行ハ若輩の身にして安輩ものゝ為に御しよく
兎角戦場にてハ不斗事雑兵までも大勢の人より
先ゟまハさし深く行と身の後常に武具ハ出合
候身と四方勝負なくハ刀まて刀なくハ組合まて勝負
なく候しても無刀なりとも組付人より先に身を合出様

まて此方を取らく見極しきらふ事也又ハ悪しく武具
足軽若輩の者刀組合之出合候事とする心さしハ不可
の心掛して能克有り此様成るもの候ハ見事さらる事にて
能心かけありしと可備し候也

当流ニ於て此座敷の内にて秘密より下へおり此何る
秘事さしとハつねに刀を持せ武術の事一生之肝
要しと此稽候也

当流毎朝床前まて此刀ハ持勝の自身抜目打
との者にて刀毒しそのまゝ掛置出組けしと

御身付ハ不断不懈志を立られ候よう御心得之事

東孝公ニ御物語りニハ惣角武士ハ先武之道を志し

仁義理を深く心得候ハゝ事足ると存候ハ甚おこたりニ而候

武士とハ不断存候ハ智恵分別ま覚ハ大事之重宝なれバこそ

大切ニ思ふ事あるべしと御申し候

東孝公前ニ而近付荒里妥人御申し其申候ハ内ニ古仁其申候

右候而畢人の珍要会法おしへ候ハ己のつめの法と申候て

おもし刀据并捻用ひつめてぬらせさる様ニ致し候と

御申し其申候ハ東孝御申候ハ左様之事ハ侍の分之紀

法ニ而無之候何とて御申しまも其段ハや左様成御申さ

以来御無用と御申ニ付据ニ居其申候荒其申候ハそれハ

仕事ニ而御待候と存候ハ智ありたる義と其師御申

御為ニ東孝御申候ニ合いまた合点不参候ハ我持たる刀据并

我抜おもへハ不抜して其切候ハ志ありて前ニ而ハ何ある安候

ハ仮ハ侍之道なくして六気を掛候ハゝ能候ハ掛けさる能候

うおもへハぬらせ切候ハ勝負を付申候ハゝ能候ハ時義を

心得候而見候へと御申候へハそこニ而申さる仁和様候へし

御申ニ両り其申候時ハ手存ニ而存立所りに當世有

中候

当　公方様御具足ニ御手ニ而被為召候御召候由
御申上候ものなし　問ニ及候ハ被為召候ニ依而出来候御前ニ御座
候と申候ニ付御尋ニ付御物語被成候
出来音信物被成御出之時ニ如何之ニ御尋ニ付御意候
て出しらく出候得共ニ御申付候ニ付順ハ御物語も被成候
程も無申候ニ付御意ニ被仰付候而音物も出候ニ申上
無之候まゝ紀而分条々音物ニ悪敷而候へハ用而御申
付候ニとの事成よし御申せ候主人へ申ケ様之事ニ御座候

右仕候ニとの主の為ニ存ニ而加様成ある人ハ申候ハ主の為成
御勤仕候而者存候ハ夜ケ様ニ仕候而仕候ハ御申候ハ恐入候而罷在候
物ニ付而入申候ハ能ニ而御申付候

十四日　武徳大成　神君伏見城ニ入玉フ

同七年二月十八日二本松落し城主梅原弥左衛門病死候　續閑談
手数之程有之ニ付御申し二本松之城主右衛門山井家
安改ニ成候へ共よし被仰付候ニ付其家元ハ加藤清正
同而加藤清正ニ仕候而武勇之聞へ秀頼ニ代より
来候

武德大成

三月七日頼宣誕生母ハ正木氏初名ハ頼時常陸之介ト号ス後ニ紀伊國ニ封セラレ従二位ニ叙シ大納言ニ仕ス

明良洪範

紀州頼宣卿大納言御母ハ正木左近大夫平康長入道観齋カ女慶長七年三月七日伏見ニ生同八年十一月七日水戸二十万石ヲ進セラル次ノ年五万石ヲ添ラル同十一年八月十一日五歳ニテ義直卿ト同日ニ御元服常陸介頼將ト号同十四年水戸ヲ轉シ遠駿ノ両國ヲ賜セ玉フ元和元年十四歳ニテ大坂御初陣安藤水野介抱奉同五年紀州ニ伊勢半國ヲ添ラレ五拾五万五千石ヲ賜ル寛文六年五月ニ隠居同十一年正月七十歳ニテ逝去紀州鴨屋ニ葬ル南龍院ト号一トセ朝皃ノ花ヲ母公ヘ送御母養珠院御返事ニカク朝皃ノ花午刻迄久シク咲セラル丶カラハ御身ノ養生ニテ長生有ヘキ叓ニテコソ若キ人ニテ御座アレハ壮年ノ保養有ラハ長生有ヘシ家中養ル丶モ花ノ手入ナト異ル叓アルヘキ乍序申入ル丶是ヨリ教訓毎度仰遣ルト也泰山公ハ猶以武勇猛ク紀州山國ト云イ様々ノ怪叓多リシヲ何共不思召友鳴遊獵ニハ御腰掛ラレタル臥木動龍ノ景色ニ成見ヘケレハ志津ノ長刀ヲ取山神也共臥木ト成玉ヘハ臥木ト社存レ見苦鋪振廻

哉動テ見玉ヘサシ申ツト龍頭ト思召所ヘ押シ當テ悆ラセ
玉ヘハ本ノ伏木ト成ケルト也其日白雨洪水獵モ成ラス三
里ヲ漕戻ス所ニ雷御舟ニ落ル火ノ玉御座近ク轉ヒ來ルヲ
毛氈打掛手取ニセヨト下知シ玉近士モ常人ニ非レハ爰彼
コト追廻内ニ火ノ玉消テ無クナリケリ下ニ詰タル水主炭
ノ如ニ成リ骨モ碎テ死タリ亦遠州ノ灘ヲメシテ寛文年中
御舟ヲ巻上茶磨ヲ廻如ニ海上荒時モ平生ノ御顔色ニテ船
ニ酔タル御側ノ者共ヲ自養セ玉フ御様子人間ノ業トハ申
サレスト御供ノ人々肝ヲケシタル事ト云常ノ御口スサミ
ニモ御心用ヒ見ヘタリ
思ヿ一ツ叶ヘハ又二ツ三ツ四ツ五ツ六ツカシノ世ヤ
人生テ願ノ絶ルヿ無實情ヲヨマレタル歌也流石高貴ノ公
達ノ御身ニモ如是武藝有者ヲ好ミ玉テ召抱ラレ常ニ武藝
ニ御遊ナサレケレ共高木右馬助ヲハ召抱ストカヤ

武徳大成
十四日　神君大坂ニ入リ秀頼ニ謁メ翌日伏見ニ返リ
玉フ

家忠日記
去年ヨリ奥州岩崎表ニ一揆蜂起スルニ依テ南部信濃守利
直去冬兵ヲ発メ退治セント欲スル処ニ寒風膚ヲ破リ深雪

道ヲ埋テ進退自由ナラス是ニ依テ利直暫ク兵ヲ収テ居城
ニ帰リ此春再ヒ兵ヲ発メ一揆ノ悪徒ヲ攻ウツ此時白石ノ
一揆等是ニ組メカヲ合スルト雖利直遂ニ一揆ヲ退治ス
此春水野隼人正忠清　大神君ノ鈞命ヲ奉テ　台
徳院殿ニ奉仕ス従五位下ニ叙シ書院番ノ頭ト成テ奏者番
ヲ兼役ス
四月小六日内藤四郎左衛門尉正成武州柄間ノ郷ニ於テ病
ニ臥ス累世旧功ノ御家人タルニ依テ　台徳院殿御愛
憐有テ醫師久志本左京亮ヲ柄間ノ郷ニ指遣ハサレ療養ヲ

加ルト雖重病タルニ依テ此月十三日遂ニ卒去ス（七十六歳）
十一日薩摩大隅安堵ノ印ヲ嶌津龍伯（修理大夫義久入道）ニ賜ル
廿八日　大神君伏見ヨリ御入洛
五月小一日　大神君参
内
二日
院参（女院御所）于時猿楽アリ
三日相國寺ニ詣給フ
四日伏見ノ城ニ還御

武徳大成
五月　神君佐竹右京大夫義宣ヲ譴責シ常州水戸城ヲ
没収シ采地八十万石ヲ減テ秋田砥澤二十万石ヲ玉フ 佐竹始テ秋田五万
石ヲ玉フ其後故有テ仙北十五万石ヲ加ヘ玉フ
武功實録
佐竹義重嫡男佐竹義宣二男義廣芦名ヲ継テ盛重ト云三男
岩城忠次郎四男多賀谷彦太郎也忠次郎嫡男佐竹義宣ノ跡
ヲ継ク今ノ修理大夫義隆ナリ故多賀谷彦太郎岩城ヲ継但
馬守也多賀谷ハ佐竹家來土村十太夫子ヲシテツカシム
武徳大成
台徳公松平周防守康重松平五左衛門一生由良信濃守菅沼
与五郎藤田能登守等ヲ水戸城ヲ守ラシム本多正信大久保
忠隣ヲ常州ニ遣シテ制法ヲ定シム殊ニ松平伊豆守信一其
子安房守信吉ニ命メ兵ヲ江戸崎城常州國府城ニ陳子テ是
カ備トス義宣異儀ニ及ス水戸ヲ去テ秋田ニ赴ク
感状記
源君怒テ侍臣ヲ詈リ玉フ時本多正信聞之御前ニ出テ
殿ハ何ニカ腹立セラルヽト云ハ　源君口ニ沫ヲカヽ
セラレテ斯々ノ事有ト仰ラルヽニ正信誠ニ　殿ノ理
也ヤア汝何ソ如此ノ破家ヲ盡スヤト云テ傍ヨリ詈之事
源君ヨリ甚シ正信ハ　源君モ老祖ト称セラレテ名ヲ
称セラレヌ程ノ人ナレハ首ヲ低テトカクヲ不言　源

君卻テ詞モナク笑止ニ思召御心出來テ火氣モ稍シツマリ
シ時ヤア汝不心得ニテ詈セラルヽトナ思ヒソ是汝ニ御教
訓ナリイカニトナレハタハコトヲ言テ巷ヲ過ル者ハ心ニ
モカヽラス是本ヨリ疎カ故ナリ其タワコトノ半分我甥子
ニアラテハ怒リ責ル事叶カラン是本ヨリ親カ故ナリサレハ
汝ヲ人カマシクモ召使レントノ御心ニテ斯ハ仰テルヽソ
汝カ祖父ソレノ合戰ニカ樣ノ武功アリ汝カ父ソレノ城攻
ニカヤウノ忠儀アリ　殿此事御失念アルヘキヤト祖
父ノ働ヲ云立レハ　源君聞召テケニモト思召アタル
色ヲ察シテヤア汝一旦ノ御意ニ違タルヲ悍カルヘカラス
怒レハ火氣ノホル火氣ノホレハ咽乾ク者ナリ御茶點シテ
持參テ奉レトイヘハ彼者御茶ヲ奉ル　源君取テ召上
ラルヽヤア汝今日ヨリ愈進テ奉公ヲ勤ヨ叶モ氣ヲ屈セサ
レ　殿サ思召ソトイヘハ　源君怒リ自ラ解ヌ正
信世ヲ終ルマテ御前ヲシリソケラレ閑門シタル近習ノ士
ナシ

天元實記

六月十一日本多上野介大久保石見守え被仰付南都東
大寺之寶藏被開蘭奢待被切勅使勤作事

右大弁光豊之廣橋大中弁總光とも云々

家忠日記
十八日肥前國ヨリ飛脚江戸ニ到来ス黒船着岸スルノ由ヲ
註進ス船中ニ乗ル処ノ者凡ソ二千二百余人

天元實記
七月ノ水戸表ニ於て東丹波守手勢ニ而右衛門馬場和泉守
手勢助太夫召抱ノ浪人共佐竹ノ牢人浪人共とも徒
八一揆を企大勢ノ家人浪ニ城へ忍入而を松平右衛門
尉殿ニ於て其段捕へ其糾明を加ニ急く白状して
其事露顕ニ及ぶ城中騒動ノ面々ニ相從して領内ノ味方を可
打取と申ノ処ニ廣中城ニ一揆ノ奴原等を從し
云々丸殿ニ國ニ成城中騒動ノ面々弓鉄炮をも発射放
此夜一揆ノ徒残ル未利ノ段出る急ぐ退散仕るとあり
其翌日浪人共東丹波守捕へ其外ノ首尾ニも召捕て
拷問ノ趣段江戸表へ注進を申入れハ安房守殿ノ大久保
忠右衛門ニ公人ニ為検使ニ石鉄一揆ノ浪人共ニ公人をも召連
江戸へ石鉄其外中ニ立合吟味ニ上方之送候公人
打ニ水戸へ於石鉄從他ニ於て彼仕置ニ任候由
東海ニ相見ゆる

武徳大成
有馬法印（俗名中務則頼）卒ス其嫡子玄蕃頭豊氏丹波國福智山城ニ居

テ別ニ采地六万石ヲ領ス　神君法印カ遺跡摂州有馬郡三田城二万石ヲ豊氏ニ加給ヒ松平源七郎カ娘ヲ御養女トシテ豊氏ニ嫁シメ玉フ本多中務及一位局婚禮ノ事ヲ司トル婚礼畢テ御腰物御脇差ヲ豊氏ニ賜フ

家忠日記

此月　大神君ノ鈞命ヲ奉テ松平伊豆守信一常州江戸崎ノ城ヲ警衛ス其子信吉ニ代テ同國水戸ノ城番ヲ勤ム（信一水戸ノ城ニ在事今年七月下旬ヨリ翌年正月ニ至ル）信吉常州府中ノ城番六郷兵庫頭ニ渡シテ父ニ代テ江戸崎ノ城番ヲ務ム

天元實記

八月廿九日　傳通院殿薨逝去（御歳七十五歳　小石川宗參寺ニ葬る）

十月十八日金吾中納言秀秋死去（廿一歳）嫡子無之家断絶也

十一月八日松平三郎四郎（時ニ十一歳）遠州掛川より江戸へ参上本多佐渡守殿ヲ以達公儀　内府公御不例ニ而御在府之時節参府御感悦之旨於御本丸より御召之若年ながら参府之御対之節青山七郎右衛門を御本丸より参上仕候處御側衆中より御前へ被召出侍從隠岐守之四男ニ而遠州より参り　秀忠公へ奉仕可仕旨被為仰付候旨其子ニ候旨能々申達候へと被仰付御目見松平七郎右衛門へ土井大炊頭へより後ニ大久保相模守

忠謙養者にて御目見仕候射仕とく

同月廿六日　内府公御上京として江戸御首途被

当月武田万千代君へ常州水戸被進　元ハ下総国佐倉

十二月洛陽東山大仏殿焼失

右大仏殿者焼る所秀吉公建立ありし其比の事なるハ大仏ハ立
ちし所先年大地震の刻被破裂候如秀吉公存中にハ地震
にて生命も無破裂候如くにして甲斐なき仕合にて三宝の
導師ハて勧招無しとて弓にて矢を放ち当る仏像
に向く射殺し悪く河原へ打捨よとて中に所を経申

甚光ありし如来成遂へ光せ大仏殿へ御安置ありし如く
間もなく病気付ましく其比の政所没後なとより
送り候処仏像にて有る事以後なる事ありて候ま
兵火まてても少く浴りなる大仏殿に来て私なる事
と有も如何して大方焼失候時代ても仏師も無之
ものにて木仏を造立事との請合と仕る仏師無之様
師方ハ仏殿とても候様なる計にて金仏を造立事
名請負候所身を被立ても来りし大坂よりの方行申
金仏をも中背に如何なる事しも地形ハ枝末との組立候

風下地之如くに仕立成申して塗立播般と調へ
本堂之後へ小山成築きに〆たゝらを仕付佛像
の頭より段々接掛候如く仕込付目見物之者幾群集を為し
此ごとく御すゝ掛に銅湯を流しかけ候へハ当時仕候ハ
未形之中へ為らせ入下地之段々より焼出一度
に焼より佛殿悉く焼失仕候ごとく千細大坂より
薦田半人正見分に参候に付委細承候よし申て牧尾
先体詠物御座

駿河土産

東坂大佛殿昔之上〆之後秀頼公之御母儀淀殿より江戸
表
御臺様之御方へ申聞之候ハ京都大佛殿本堂
計之儀ハ秀頼より再興可有之候迚既に其御請に
及候処に請負人は鋳物師方の不調法之依鋳立より出火
致し候故より右本殿閣共に焼失に相成候に付
秀頼之建立にハ難成候間関東より御合力に被成度
よしに付本多佐渡守殿へ被申越候に付　大御所様
の御耳にも被達候様にと申し佐渡守に被仰付候て御用之序に
佐渡守より之趣と被申上候得ハ　権現様被仰出候ハ淀殿
儀ハ女儀にも有之　将軍にも未年若之事なり

其方なとの餘事にて古張なる筋なと紀候と我等く
云傳せしと行る法脈流を限りたる儀なりとの作にてさき
らの佛法なると大に当惑被致し法張の如くに重る法係にハ
其方なともとくと可得被致し是ハ南都の大佛の
事なり
聖武天皇之勅願にて東大寺に建立ありしきる
との義なり然るに源平之兵合に平中将重衡
に焼亡く堂塔焼失に及ふ如く然るに斯ても
時に天下執之儀なきハ右大将頼朝より建立可被致

なる故僧寺坊と西行法師と如何会法然と勅をとて
建立をたりとなり
聖武帝勅願にて大佛殿被建頼朝ハ将軍として再建之
たり頃てや京都にも大佛と行ふもの太閤秀吉の物数
寄として建立被致し出たる儀なきハ親父之志とおもひて
秀頼公の建立可被致ハ格別　将軍家様には御本人
あらさる事なれハ其方江戸へ帰りけれハ　将軍へ申達
まして上意にて此儀ハ大佛に不限也る日本
中ハ古来より由緒有堂社佛閣と云ハ数限も無之

候ありて申達さるへく云云上意は悪しく候上御使来
申付して置けとも以ての外にて八不而有義をも用捨
勤め候の下有候ありて増てや大小によらし其身往来旅
新に建立あらしく何の候も此以て安堵し事あるへし
と　将軍へ申達し年寄ともへも能々申含め候以後
ましく上意にて仕候よし

武徳大成
島津龍伯カ使者嶋津圖書忠長伏見ニ來リ罪ヲ謝メ云義弘逆黨ニ與スト云氏然モ張本人ニ非ス龍伯幸ニ咎ヲ不蒙時ハ義弘カ死罪ヲ侑セ赦レンヿヲ乞　神君許容シ忠長ヲ召テ云龍伯累世領スル所ノ薩摩大隅両國及日向ノ諸縣郡故ノ如ク可領嫡孫忠恒其嗣ト成テ家督ヲ續ヘシ義弘逆黨ニ與スト云氏陳謝スル所謂レナキニ非ス強テ是ヲ咎ス我言僞リナシ龍伯早ク洛ニ入ヘシト云云忠長使ヲ馳テ是ヲ告龍伯洛ニ入　神君ニ謁セントス時ニ伊集院久直蜂起國中静ナラス是ニ依テ家臣等義弘ヲシテ先洛ニ入シメント議ス義弘云我　神君ニ對シ一旦敵ト成時ハ拜謁スルニ憚有忠恒ヲメ洛ニ入シムヘシ忠恒云タトヒ父ノ罪ヲ以テ我身ヲ害セラルト氏悔ナシ則洛ニ入ノ心ヲ決ス既

ニメ伊集院カ黨悉ク平忠恒即日発途洛ニ向フ時ニ福嶌正
則暇ヲ賜テ國ニ皈ル兵庫ノ舩中ニテ忠恒ニ逢正則即舟ヲ
帰シテ忠恒ト氏ニ大坂ニ至使ヲ馳テ本多上野介正純ニ憑
テ事ヲ　神君ニ告暫ク大坂ニ留滞メ　神君ノ伏
見ニ入ニ及テ先客ト成テ忠恒ヲ携テ登城家士嶌津忠長伊
勢貞昌相従　神君對面恩遇甚厚シ鷹馬ヲ玉ヒ島津家
悉ク安堵ス忠恒近臣ニ憑テ請テ云宇喜多秀家薩州ニ隠レ
居ル願ハ死罪一等ヲ減セン　神君是ヲ許ス
武功實録
嶌津龍伯男子ナシ女子一人有是ヲ兵庫嫡子又八郎ト夫婦
タラシメ家督ノ筈ナリ然ルニ又八郎於高麗病死ス故ニ又
八郎ヲ右息女ト夫婦タラシメ家督トス此中納言也此息女
以ノ外麁面ニテシカモ嫉妬ノ心フカシ中納言殿ヲ殺害セ
ントイタサレシ事両度也龍伯一周忌ニ隠居所ノ國府迫鹿
児嶋ヨリ十里アル所ヘ為吊被越シ時是ヲ幸ト其マヽソコ
ニ蟄居セシム此料一万石也息女髪ヲ短クキリ山伏ノ如ク
姿トナリテ看経ハカリニテ月日ヲ送ラル看経ノ願ハ島津
家長久ノ事ニテアリシサテ中納言殿男子二人アリ一人ハ
西ノ丸腹一人ハ東丸腹也東丸ハ嶋津又左衛門督吉氏ノ娘

ト夫婦トナリ持タル子ナリ右両男子同年ニテ西丸腹ハ八月
兄ナリイツレカ嫡子ニ立ヘキヤト存シテレツレ尤嶋津系
圖ハ國府ノ内室ノ手ニアレハ渡スヘキヤウナシ故古老ノ
者國府ニユキテ達テ所望ス其時系圖ヲワタサレシニ是ヲ
必々中納言殿ニ渡スヘシク候皆吉氏腹ノ男子嶌津氏ナレ
ハ渡スヘシ尤嫡子ニ定ムヘシト申サル今ノ大隅守ナリ

天元實記
同廿八日嶋津忠恒伏見へ参上仕り浮田秀家殿薩州
へ迯行り被申候所ニ内何者ニ候哉甚以不届ニ候
また難成有之候処如右を度く左馬不田勘十郎

ニ而申家来の侍伴以申ニ者人へ申ニ手力ニ仕合ニ生
句偏秀家殿同も当ニ取ぬ風情ニ有之ニ而右家来共
中候ニ而彼者儀ニ被打ニ拝人ニ而申ニ付何事ニ而其節
此下度ニ而此所江被申上候得共痛ニ而相人
来ニ候様にて種々と行る儀も有之ニ而此間ニ難ニ候秀家ニ
助命之上相頼候ニ付此間ニ者今度天下騒動ニ付而根本ハ
候而秀家壹人ニ候所行ニ付宇喜多石田が取様候も仕候
手ニ申付候ハ上ハ此ニ付而秀家様助命之上有儀ニ付難計ニ候
有之候ニ付而忠恒様ニ而御様ニ而申候ハヽ付ニ候旨

其後中上ハ御命乞致候ても宜へし先薩州ゟ御咎也
候の作ニ付猶有て秀家父子妻へ候ハ家来方ニ大坂
へ上京仕候處兼而被成恐入候由御申上候へハ妻へ候ハ家来
共儀御尋候而秀家關ヶ原表ニ而敗亡ニ付親子妻へ候へ者共
縁切被成候て住居仕度候と申候も委細ニ御尋候し御中山
の何ぞ申ス而存て何人共脇差ニ御尋脇刀と御指候ハ其人へも
在之由申ス所ニ而御座候主人へ之為と存被成者へ候
脇刀ニ御座候處御何人ニ相渡し可申ニ付以使の上
大ニ刀様ニ候得共相渡し候儀ハ御座候ハ御家来候ニ付御咎

黒田勘十郎儀ハ浮田秀家へ仕候者浮田父子の命を御助
被成八丈嶋へ流罪被仰付候よし
秀家ハ嶋ニ付或時江戸の町人八丈嶋ゟ被召帰ける
ところ有りし花房志摩守殿被成御附人と候ハ八丈嶋ニ
おゐて浮田八郎殿と申人と対面いたし候ハ無事ニ而
未無事ニ而被居候と有ハ浮き通様ニと被尋候得は
其者申候ハ成程無事ニ而被居候得共米無之被成候由
就ては秀上仕候節ハ米相送候ハ御喜悦被成候とも
此度被下候八郎孫扨へ被遣候ハ残米候も舎時頃へと御免

御座候今一度日本之地へ帰り花房ら方ニて某か命の
助り候段一通聞て死候事ニても悲しく御座候と申候へハ
志ハ一段尤候老眼ニ成候て浮世ニ昔ハ目録を存し之
悔させ申候日の夕方左平太被参候へハ右之通ハ実々浮悔し
きの申たる様被御座候はゞ某新居條ニて浮田
存命之内今か御座候存候得御免被仰付候様ニ被成候
と御申候へハ大炊殿も左様被成候得共御同役中へも遠見
可申与存候へハ左平太申候ハ存命可致由ニ極老
ニ罷成候へハ明日之儀も難計候間何卒早く

御相続被成下度と申して御帰候へハ翌日晩方ニ御用在之
候旨御触御座候て有大炊殿被召合書付を以其上被仰候
貴元被成候而御同役中申候遠方上意之趣被仰
於御月例御勘定所へも申達候旨浮田八郎存命之
旨某新居條ニて伊豆守代官所ニ被差遣候得共
被申候由ニ候実不実ハ不存候得共　大猷院様御代

始之由承候旨申候由
寺社多候ニ付先年伝承之通浦上ヨリ以下者侍共
其外毎度之主意有之寺社方奉行ハ浦上之家臣有り

直家悪性にて当郡を持ける人を誘殺して
ありて後に殺して奪ひ取りしと度々せらるゝとなん
浦上をも殺し終に備前美作両国の主となる八郎
殿は直家が子にて太閤と間よく始の太閤備中高松
城攻の時明智反逆して事を告来り門より
さしと思ひの如く其日中に和をなし其時八郎殿一味
して力を添へらるゝによりて高松の城をもとに
移さし世をかくして上京して天下を保ち給へく間よく
扨て舞に右の如く息女ありし此息女ハ前田筑前守

加賀大納言殿の
息女を養子にして八郎殿へ嫁せられ
此時の 備前美作の 八郎殿未だ十七計にて直家も存生なり
しかとも病毒にて大病なりしを聞によりて八郎殿
を田舎に置て五万石三万石所持せる直家の臣を育て
徒合して高松の城をも力を添けるとて八郎殿太閤の
舞になりて後官位昇進して宇喜多中納言殿
とて浮田の位官を備へ給ふと浮田秀家殿に 東照宮御
利運に成りし八丈島に遠流せらる今に存生し
よし 癸卯年老人九十九才までのとの事なり

武徳大成
今年奥平美作守信昌卒ス　神君加納城ヲ信昌三男忠政ニ玉フ忠政初メ菅沼氏ニ養ル此ニ至テ信昌カ封ヲ継松平摂津守ト号ス其弟松平下総守忠明モ三州江州両國ノ内ニテ采地ヲ賜リ参州作手ニ住ス下総國小美川城ヲ土井甚三郎利勝ニ玉ヒ食邑一万石其外下野國壬生城ヲ日根野織部正吉明上総國久留里城ヲ土屋民部少輔忠直常州多賀郡ヲ戸沢九郎五郎政盛ニ玉フ高木政次青山幸成モ増地ヲ給ル金森法印長近飛騨國ヲ其子可重ニ譲テ伏見ニ候ス

神君眷遇浅カラスシハゝ其亭ニ遊テ終日飲宴シタマフ

古人物語
神君ノ御時御能アリシトキ芝居へ笠ヲキヨトアレトモ笠着サル者十人計リ有大分景勝者ニテアラントテ景勝ニ被仰付某者也笠ヲ着ヨト被申付テ笠キタル也正宗居ルニ三人カタワノ狂言アリサシアヒ也ヤメヨト被仰付ト也

武徳大成
慶長八癸卯正月　神君伏見城ニ在兼テ命セラルヽニ依テ列候先大坂本城ニ到リ秀頼ニ謁シテ後伏見ニ来テ賀儀ヲ告奉ル十五日松下石見守重綱遠州久野城ヲ改メ常州ニ於テ食邑一万石ヲ玉フ其日甲斐國ヲ五郎太丸義直ニ賜リ備前國ヲ池田輝政ニ玉ハリ其次男忠継カ封國トス忠継

時ニ五歳後ニ左衛門督ト号ス　神君ノ外孫ナルヵ故此
ノ如シ輝政即チ忠継ヲ携ヘ伏見ニ到テ拜謝ス　神君
吉光ノ脇指ヲ賜フ二月六日森右近太夫忠政カ領スル信州
川中嶋ヲ改テ美作一國ヲ給フ川中島ヲ上総介忠輝ニ賜フ
武功實録
御前ニテ本多上野介申上ルハ松平武藏守殿ヲ脇ニテモ褒
候三左衛門殿ヨリモ意入ヨク奉公ノ躰律儀ニ相見候ト云
御意ニ武藏守ハ金吾中納言ニ能似タル所有惣テ武士ハ唯
律儀ナリト云計ニテハスマヌモノ也佐竹カ石田ヲ囲シ時
家來共ニ甲冑サセテ石田カ川ヲ越迄ハタトヒ　家康
來ル氏ヨセツケマシト云シ此樣ナル㕝ヲ武士ノ贔屓強キ
トハ云モノ也無性ニ依怙ヲスルヲ贔屓強キトハ云フヘカ
ラス惣テ敵ニテモ急度志ノ有タル者ハ味方ニモ頼母敷ソ
ト被仰候由
駿河土産
関ヶ原御合戦以後浅野左京大夫幸長事ハ甲斐の国を
まへく被居候所御加増ニて三十七万石余紀州被下候て
紀伊国和歌山へ被移候以後蒙度存候節熊野山へ参詣仕
其後江戸表へ被下候処　権現様被仰候ハ其方先日
熊野山へ参詣候由申帰候節紀伊国の者共申候ハ

より此寺ニ付上意のことく和哥山へ御下りニ十日計も
逗留仕候ところ申上候得共重く此寺ハ難成て逗留中
紀伊守へ御頼ミ地見よ此中付字る拙して上意有紀州の
河と申て吉野高野の流より流れ来る大河在候
此河へ船にて此高野へ供に參り細川與七と云し留
ら申ひを見物仕て後山高野に此高野ハ聞候ても此高野申ハ
気ハ殊之外目出度して紀見物事に此度ハ此山高野の
候に付い所よ能く記録の合点しかつてさる候此度ハ
と存し御申上候得共又さ何事もそうと有る御尋に付

雑子山高野ハ殊之外也しおかし数々も物数多く在之
中山高の定る様子よく存有しかとも御座候へ共大師の
往古殺生き禁制有所哉処ハ外様かよく相若存之
敷候よ何よあいかねて存有之一度ハ高野なと
何もことし御申詠之外物数も有之有之候定る不様院
まで不有しと存候得共一段と様院玄人誌候人大貴我
打古段に存候て有之事麿勇人其殺候て有之候と
中上候得共
權現様御承知被為成て有之候分會点の
まいらぬ筈之事なり紀伊守せられ候ハ誰の山高野と

云物にて物数多ありて様々なる御事也と上意に
被仰候とあり

武辺咄聞書
御右京亮ハ痘もあしくの御根を御相談あられて若気
の御批判有り本多蔵四郎と云者為百石ほと身神にて
若気中間身よりさう多く右近身の縁辺を結候而
候上ハ御次に御見に御取次も不入又越度も無之候
御覧御意に入越前ゟ右衛門へ御成佐渡守に御頼
御光蔵四郎ハ佐渡守親類ありて伴ひ九鬼大親類
御手人上方へ公方への縁辺あるへし今一人ハ九鬼に

出かけて御事公一筋ならぬ所存あるにハ家督を右京の
縁者有り間しき事にても御暇に被仰付候て御暇を
中々の

天元實記
慶長八年二月十二日　内府公征夷大将軍牛車兵杖を
給ハり淳和奨学両院別当源氏長者右大臣に任し同日
越前守家康公参内任し従一位に叙

武徳大成
勅使伏見ニ来テ宣旨ヲ傳フ官務外記宣旨ヲ献ス永井右近
太夫直勝受取之一宣旨毎ニ覧箱ニ入御前ニ備フ毎度砂金
一包ヲ賜フ告使列ニ依テ庭上ニ出テ御前ニ向ヒ高声ニ御

昇進ト呼フ此日廣橋大納言藤原兼勝勧修寺参議藤原光豊
武家之傳奏ニ補ス賀儀ノ饗應ヲ玉フ三宝院門跡伴食タリ
源秀康参議ニ任シ従三位ニ叙シ池田輝政少將ニ任ス
明良洪範
神君三葉葵ノ御紋ノ事説々多シ新田金山ノ城主由良成繁
爷横瀬勘九郎小田原陣ノ時氏政ヘ與力スルトイヘ圧老母
秀吉公ノ御勝利ヲ察ノ上州ノ碓氷ノ上方加勢少々遣嫡孫
新六郎高久ヲ携テ小田原ニ往テ兄爷ノ恩免ヲ願秀吉大ニ
感シ常州牛久保ニテ五千石ヲ老母ニ賜フ小田原落去後兄
成繁ハ領知不残没収老母ニ賜ル牛久保ノ領知ニ蟄居ス國
繁成繁二代武威ヲ奮フト云ヘ圧悉ク此時ニ一族共ニ食邑
ヲ没収セラル翌年二月九日成繁秀吉公ノ臣下ト成リ嫡子
新六郎ハ秀次公ノ小姓トナル江州ニテ五千石ヲ賜ル此家
ノ紋代々　神君ノ御紋ト同前ニテ秀吉滅後江戸御城
ヘ登城ノ時諸士　神君ノ公達ト思ヒ下馬ノ通リケレ
ハ縁家ノ近藤石川大ニ諫テ水葵ニ改ケル新田義貞朝臣モ
常紋ハ三葉葵ト見タリ新田義貞ノ甲ニ三葉葵ヲ付テ今由
良信州ノ家ニ有之由慥成説也依テ御紋ハ　御代々ノ
事ノ上ニ今云所ノ説ニ似タルノ事モアルニヤ関ケ原ノ時

新六高久ヘ逆意ヲ進メ一味功ヲ遂ハ出羽ノ國ヲ可遣トノ
以書簡ヲ　神君ヘ申上ル御感ヲ蒙リ出羽守ニ任セラ
ル、ト云又以秋元越中守新田桐生ノ名アル士五十人被召
出小山在番ノ與カト被定　秀忠公御代慶長五六年ノ
項也

天元實記

今年板倉四郎左衛門勝重従五位下ニ叙任伊賀守ト号シ所司代
京都諸司代トシ本職ヲ被仰付之

武徳大成

廿一日　神君伏見ヨリ洛ニ入廿五日参
内將軍宣下ノ拜賀アリ其儀調タ十人先達テ行次ニ同朋全
阿彌騎馬其次奉行板倉伊賀守勝重騎馬雜色是ニ随フ次ニ
隨身八人二行騎馬其左ハ山上弥四郎島田清左衛門高木九
助近藤平右衛門其右ハ本多藤四郎渡辺半藏鵜殿善六郎横
田弥五左衛門次ニ白丁七人次ニ諸大夫二行従騎左リハ佐
々木民部少輔近藤信濃守松平若狭守戸田釆女正石川主殿
頭酒井丹後守永井右近大夫三浦監物右ハ竹中釆女正森筑
後守三好備中守三好越後守内藤右京進秋元但馬守松平右
衛門佐松平出雲守次ニ御車本多縫殿介康俊其側ニ候シ御
劔ノ役ヲ勤ム布衣十八人歩従左ハ成瀬小吉安藤彦兵衛柳

原甚五兵衛阿部左馬介豊嶋主膳林藤五郎朝比奈弥太郎石
川平三郎都築此右衛門右ハ米津清右衛門中山佐助柴田左
近横田甚右衛門日下部五郎八長谷川久五郎伊奈熊藏加藤
喜左衛門鳥居九郎左衛門其次ニ騎馬ノ諸大夫二行井伊右
近大夫直勝里見讃岐守義高左右相對ス松平飛騨守忠政松
平甲斐守忠良左右相對ス松平玄蕃頭家清松平出羽守忠政
（本名蜂須賀）左右ニ相對ス本多豊後守康重本多上總介正純左右相
對ス本多中務太輔忠勝石川長門守康通左右相分テ殿タリ
次ニ越前参議秀康豊前参議細川忠興若狭参議京極高次播

磨少將池田輝政安藝少將福嶋正則各塗輿ニ乗テ扈従ス御
車宮中ヘ入拜賀ノ式古例ノ如シ
龍顔ヲ拜シ
天杯ヲ玉フ
天皇ノ曰兵革早ク治テ大平ノ基ヲ開ク事悉ク　將軍
ノ武功ニ依テ也珍重々々　神君拜謝シ白銀一万両献
奉ラル千両ヲ親王ニ献シ二千両ヲ　女院ニ献シ千両
ヲ女御ニ献ス其余官女二十人白銀ヲ賜フ或五百両或三
百両或ハ二百両以下各差アリ事畢テ伏見ニ帰玉フ

献物

主上　銀子千枚

親王　銀子百枚

女院　銀子二百枚

女御　銀子百枚

銀子　三十枚　新大すけ殿

銀子　三十枚　こんのすけ殿

銀子　五十枚　長はし殿

銀子　三十枚　めすけ殿

銀子　三十枚　大おちの人

銀子　二十枚　新ないし殿

銀子　十枚　いよし殿

銀子　五枚　御こや殿

銀子　五枚　御あ丸殿

銀子　十五枚　御まくの荒女人

銀子　十二枚　女孺江人

銀子　二枚　御はした二人

銀子　六枚　御とれし二人

銀子　五枚　うち彼、

銀子　五枚　おちの人

銀子　五枚　おやこみおうう

銀子　三枚　忠めんのうち彼

銀子　三十枚　ゆうつのゆきし

天元實記

伏見ノ城中ニ於て忠死をとけられし人々へ御中ニ子息并へ今年御加

一倍宛の御加恩并ニ城下ニて中山ニて鳥居左京亮忠政へ被下一倍ニ割

ニ御加増ニて奥州岩城十万石被下其上岩城へ入部仕候ニ於てハ

亡父彦右衛門追善の為一寺を建立仕候へとの儀ニて御借料之儀も

公儀より御寄附ニの被下置候ニ付左京亮岩城へ入部仕

仕候と其儘右之寺院建立被致候寺領百石之寺領を被下

亡父彦右衛門戒名を以寺号と被致長源寺と申候由也

武德大成

三月池田輝政江戸ニ來リ　台德公ニ拜謁シ備前國ヲ

玉フヿヲ謝シ奉ル　台德公酒井忠世ニ命シテ旅資ヲ

玉フ輝政方物若干ヲ献ス　台德公輝政ヲ營中ニ召饗

應ヲ玉ヒ利劍一握駿馬二匹及ヒ虛堂ノ墨蹟ヲ玉フ飯リニ

及シテ大久保忠常安藤重信ヲ〆是ヲ箱根ニ至ラシム輝政

伏見ニ歸リ　神君ニ請テ云ク忠繼年猶幼シ成長ノ間

其兄利隆ヲシテ備前ヲ治シメン　神君許ス、
感狀記
池田三左衛門尉輝政其寵臣若原右京中村主殿ニ令シテ諸國ノ浪人武藝才器アル者或ハ米穀或ハ金銀ヲ與ヘテ扶助スル者數百人思慮アリテ其米穀金銀ノ出納ヲ不問是若大坂ニ變アラハ関東ノ御出馬ヲモ不待播備淡ノ兵士ニ浪人ヲ加ヘ自督シテ獨是ニ當ラント欲スルニアリ殊遇アルニ由テ殊忠ヲ致サント思ヘルナルヘシサレハ一人ニテモ有ントスル志第一タル故ニ婦女ノ愛器物ノ玩此等ノ費ヘヲ禁シテ二三万石ノ領主ニ倖シ常ニ人ニ謂テ云ク大國ニ封セラルヽ者禮遇篤シトイヘ氏手足ノ勞ヲ以テ仕スヘキ叓ナシ唯多士ヲ育ミテ天下ノ干城トナルノミ也是ヲ以テ自分ノ娯樂ヲ抑損シテ財ヲ武備ニ散スト輝政言忠尽ノ將ト謂ツヘシ

天元實記
四月廿二日秀頼公内大臣ニ任

武徳大成
六月　台徳公ノ夫人　崇源院姫君ヲ携ヘテ伏見ニ至リ　神君ニ謁シ玉フ

家忠日記
六月小四日越前國丸岡ノ城食邑四万石本多飛騨守成重ニ賜ル

同年七月廿八日　秀忠公御姫君〈廿七歳〉秀頼公へ御入輿
〈秀頼十二歳〉此時　将軍様ニハ伏見ニ被遊御在城　秀忠公
ニハ二條之御城ニ被遊御在城　御臺様も姫君様伏見
迄御送り有之候被遊御上京被遊御留主之内ニ御女子被遊御出生候也
〈此成長之後京極若狭守忠高室〉姫君御船ニ而大坂之城へ被為入大久保相模守
忠隣御輿ニ附添時ニ而両岸大名衆池之為河岸を警
固ハ黒田甲斐守弓鉄炮長柄等被出候場所尾張役人
数三百人ニ而右御船を持せ御船之通り罷出候御座
候船場之様之如く常ニ被申候也後大久保忠隣御輿

此度浅野幸長足軽衆被致候由之
右御入輿之節大坂之城大手より玉造口通り御道筋
ニ至迄役人手ニ而警固致候由ニ而白練絹御衣装下ニ而白綾之儀ニ而まで之度
相調有之候如何相成候て相市正方より薬師子鹿之候ハ
将軍之御機嫌ニ相違無之由申遣ニ付候ニ而
相止候由之
〈駿河土産〉権現様御代之儀ニ者有之候事　台徳院様御代之比ハ
世上共ニ万事ニ手軽き儀共ニ有之　公儀之御
規式等ニも急度相定まる御儀ニも有之候　殊ニ大中候

権現様伏見にて御城にて御能あり
其節松平新太郎六歳にて有し其時始て御目見仕候
時に着たる紀の小袖にて御所作を仕り右の衣服を見ても御覧
あらる御服にて仕たる事あまりに武士の子はたまさかる
其上ひ仕りて一段と事にて有上意にて有しとくに候
秀忠様御代に成新太郎成人して江戸へ下り初て御
目見仕り其上に御節 織田有楽といふ大方とかく成かき上座にて
茶を点て相伎仕相に御座敷にて御目見仕候時新太郎
をもて其はしらや御着をも遊しよし皆知りけひたるか

其上をなくおもひやるか御手にまかせ召食候其中に大奴日に
せよとの上意にて御前にはしくし御膳にて主御料理被
仰付御時一段と御挨拶に人々にいしく有楽は織田常真と申候乃
彦へ大坂落城にて松平新太郎が茶を仕相伎仕しまくり
の御料理茶汁にて相伝し大根に鶴の汁を賞翫候
魚もし焼物にても遊ばし候とく
又は新太郎後妻物語にて御奉公申く

天元實記
八月十日水戸中納言頼房卿御誕生 御初名 鶴松丸

明良洪範
水戸頼房卿中納言御母ハ蔭山長門守氏廣女子ヲ 一 棒

君有命太田新六郎重政養ニシケリ慶長八年八月十日伏見
ニ生セ玉フ　神君ノ十一男也同十一年九月廿三日常
州下妻ニ領ヲ進セラル同十四年十二月廿三日ニ水戸二十
五万石ヲ進セラル于時七歳也其后松岡小川田三万石ヲ加
ヘラル今ハ二十八万石元和六年十八歳宰相中將寛永三年
上洛ノ時權中納言從三位后正三位寛文元年七月廿九日逝
去五十八歳水戸太田ノ郷ニ葬ス源威公ト謚ス旗本大將軍
ヲ嚴命ヲ以テ蒙ラセ玉フ世上三家ト云ヘ𪜈ヤ吾家ハ御家
門越後越前同前ト昇下被遊然𪜈殿中ニテハ中納言列座ノ

節ニハ尾張光国御紀州光貞御ヨリハ上座ニ着セタヽフナ
リ　公方ハ官位次第ニメ御家ノ格ハ其着座ノ𪜈奥表
段々ニ御目見ノ場有テ其席々ノ上首有㕝也

家忠日記
九月小十一日武田信吉逝去（水戸城主二十一歳）
十月大三日　大神君山岡道阿弥カ宅ニ渡御アリ道阿
弥饗膳ヲ献ス山岡主計頭景以カ嫡子新太郎景本（于時八歳）ヲ道
阿弥養子トシテ今日始テ　大神君ニ謁ス常陸國古渡
ニ於テ食邑一万石ヲ賜ル

武德大成
十一月七日　台德公右近衛大將ヲ兼右馬寮御監ニ任

シ玉フ同日　　神君頼宣ニ水戸城ヲ玉ヒ二十五万石ヲ
領セシム此頃丹羽五郎左衛門長重江戸城外ニ蟄居シテ罪
ヲ謝ス　　台徳公旧好アル故ニ其咎ヲ赦シ常陸古渡ニ
テ食邑一万石ヲ玉フ歳末ニ及テ　神君江戸ニ帰玉フ

武辺咄聞書
紀州吉田の士松本雅楽助持（佐々木末流）ハ兄刑部と天正十三年
に秀吉根来攻し内吉田に籠て防ぎけるが長坂を
築き吉兵衛門とせしを入水攻にかけしかば兵士或は溺死し
跡を絶し又ち逃去者三十余人前田是等に於て兄弟共に
舟にて阿州に渡り隠れ居たりしが支行されしに
重代の刀三好家より授けし一族各命を償ひける雅楽助は
大和大納言に仕へ軍功を励し出退治し後千石を領し秀長
没後朝鮮征伐し後浅野家に属し晋州にて城責に従ひ
村にて攻損し後大坂天満にて住し慶長八年八月
罪人有て大坂にて奉行小西播磨守市中にて禁捕させ
けるに因人の友五人来りて罪を許し衛をさけらせ
帝ちかの因人を守る者共各兄物に来同に罪人
頭を越え友五人と逃去処に雅楽助は彼因人を追ひ
ける隣に往けるが忽ち同田具紀の刀を授けて出

二人ハ親族一人ハ下人にて追るに抜て比興者と罵る故家人廻し
搦んとするを已に合切結ぶ忽三人切伏二人ハ逃去因
人を揃へ行て搦んと構ふる時佐助ハ又追返て二人の
逃去たる内壱人を切倒し又々附ニ手ハ家来一ヶ所も手疵
負ふ事なし播州大夫殿是に感し其佛の刀をさへ生涯
離さず候由聞く五百石にて召抱 子孫吉段ト云者 慶長十五年二月侍
家と喧嘩し二人を切て立退き紀州蔵代ニ蟄居
し彼教乃末禄を以生る者成事なの道知らて返之
ことして終に天年を保て死去せし

武徳大成
慶長九年甲辰正月　神君　台徳公共ニ江戸城ニ
在ス列候諸士登営歳初ヲ賀ス十五日新庄駿河守直頼江戸
ニ來リ　両君ニ謁シ罪ヲ謝ス云ク素ヨリ忠義ノ心ヲ
懐クト云圧上方衆悉ク三成ニ属スルニ依テ孤立ノ志ヲ成
難シ一旦敵ニ與スト云圧慈宥ヲ垂テ麾下ニ列玉フニ於テ
ハ僥倖ナラン　両君是ヲ赦ス

天元實記
慶長九年二月四日江戸より諸国への海道筋ニ一里
塚を築しめらる大久保石見守是を成奉行す　同年
五月下旬悉く出来のよし

ならん事一里塚のやうにて何ごとも末代植てハおのづから
ゆゑを一段に続くの御手形何末代為植への中の方と仰有候
ハ家又よいまを為植ハ柏なと有候ものハ我なん事ハ榎を為
植よとの御事と申遣し候ハ々を御して榎を為植候とく

武徳大成
三月朔日　神君江戸ヲ発シ豆州熱海ノ温湯ニ浴シ玉
フ

家忠日記
二十四日黒田如水卒去ス（六十九歳俗名官兵衛孝高）

二十七日　大神君伏見ノ城ニ着御

二十九日　大神君池田輝政カ宅ニ渡御アリ輝政饗膳
ヲ献ス于時輝政ニ禄数多賜ル室家（大神君御姫）ニ黄金二十両ヲ賜
ル

天元實記
四月廿日参議秀康卿越前ゟ御願以後始て江戸へ
参向　秀忠公品川迄御出迎御供ニて九御殿ニ御座
て御休息ありて大手先大久保相模守屋敷を明け
秀康卿の御住居ニ此屋敷を御渡被成候

家忠日記
廿一日　大神君浅野紀伊守幸長カ家ニ渡御アリ此月
松平五左衛門尉一生卒去（三十五歳）

武徳大成
六月十日　台徳公洛ニ入二十二日参

内此日松平忠利従五位下ニ叙主殿頭ニ任シ水野分長従五
位下ニ叙シ備後守ニ任ス
天元實記
七月十七日江戸の御城内ニ於て 家光公御誕生
武徳大成
母ハ源達子崇源院浅井備前守長政カ女也酒井雅楽頭忠世
胞箆ノ役ヲ勤ム 台徳公ノ御嫡子タルニ依テ
神君甚御寵愛其幼名ヲ授ラレ 竹千代君ト称シ奉ル
天元實記
廿一日伏見ニ於て 将軍家宰相秀康卿の亭へ御成
右宴て御能御興行の御祝儀相済て有御庭ニ諸人奉拝
相撲御覧御桟敷ニ付加判し 相撲取礼を越前し 相撲
追手風と云者相撲人追手風之番勝て則名字ゆるさる
家忠日記
十八日菅沼織部正定盈卒去ス六十三歳
武徳大成
八月宗對馬守義智江戸ニ候スル 神君曾テ命有テ曰
太閤再ヒ朝鮮ヲ征罸ノ交信断絶ス我朝鮮ト遺恨ナシ彼國
和儀ヲ欲セハ其請所ニ任ヘシ然レ圧吾ヨリ和義ヲ求ルニ
ハ非ス汝對馬ニ皈リ朝鮮國王ニ諭シ彼レカ心ヲ試ムヘシ
義智即對馬ニ皈リ使ヲ朝鮮ニ遣テ和交ノ事ヲ問朝鮮王半
ハ疑ヒ半ハ信猶恐忌ノ心ヲ懐テ今年松雲孫文彧對馬ニ來
テ曰和義偽リナクンハ江戸伏見ニ至テ 両君ヲ拜

ヘシ若滞アラハ速ニ国ニ皈ラン耳義智其赴ヲ家老柳川豊
前調信ニ示諭ノ　神君ニ告ス　神君曰吾來春
右大將ト共ニ洛ニ入ヘシ汝朝鮮ノ使ヲ携ヘテ先京ニ入テ
可待ト云云調信國ニ皈リ義智ニ申義智朝鮮ノ使僧松雲及
録事孫文彧ヲ携テ洛ニ入板倉伊賀守勝重令ニ依テ大徳寺
ヲ旅舘トシ厨料ヲ施シ授ク
是年土佐國主山内一豊從四位下ニ叙シ䃰茶壺ヲ賜フ松平
伊豆守信一從四位下ニ叙ス安藤重信從五位下ニ叙シ對馬
守ニ仕ス酒井宮内太輔家次ハ上野國高崎城ヲ玉リ五万石
ヲ領ス松平三郎四郎定綱下総國内五千石ヲ玉ハリ永井傳
八郎尚政常州貝原ニテ千石ヲ領ス
武徳大成
台徳公江戸ニ帰玉フノ後數月ヲ經テ　神君モ又江戸
ニ帰玉フ
天元實記
今年十二月松平伯耆守忠一（中村家）家亡し横田内膳を成
敗す其故は忠一年少にして行跡猥りなるを[illegible]横田内膳荒
記の[illegible]亡父の武功の譜代たり[illegible]古老[illegible]
[illegible]殺し[illegible]用ゐ[illegible]例近く
百姓[illegible]

所我以下何同揺些〻難ヶ紀武士当不法之…存候処
出月を以是見候処如くあらし日月忠一是を悟ら出候
人安井清右衛門近藤若右衛門玉置宗左衛門在家長右衛門等を
中老と申候して横田を殺害せ後を首とし如く四人ニ内
之度若右衛門老人路不仕後して種々中嘉以とり人天忠一
取引申し相残三人へし笑としおい候し横田を妹申し
林紀料理を語させ方として酒肴を催し手虚ヲ合
忠一刀ニ横へく横田を切横田ぬく庭を而下下座と
立て次の間へ追し候忠一并三人へ者共横田を追て

次の間へ来る処ニ横田ヵ刀を取持来る小童之の刀を
接忠つよ切付以後宗左衛門太刀ニ而是を以て清安庭を
為ヶ附子を度若右衛門并太刀抜合以清共路不存く
して互日横田ヵ横わりも三人へし若干右所存以下月
若も若ての術しのごとく若菜し太刀一武切し横田を
殺害候段義も亡いし〻し家来ヲ為し同所ヲ満て
同居り日数ヵ乗しく如く物語候ハされハ〻を思ひ
長刀以て横田候切殺以伴〻幼童をハ安井道家柿
切殺候ともく同脇ヵ嫡子横田之馬是〻以居候候也…

於私忠一家人々之内にも柳生五郎左衛門堀三郎と申者
初将軍之為御一味して繁山ニ楯籠候ニ付以外なる
騒動と成り雲州辺へも相聞候ニ付堀尾帯刀同信濃守
父子并ニ人数を以御差遣被遣し忠一人数と
一同に繁山之城を取囲み急ニ攻撃候故ニ城も落
住地を引退し能済きなれ共之内にも命を落し
病と成りたる輩も数輩有之候共多略と云
成候ニハ不付して城将之為を始として従軍共不自害
以て之事済候へし是ニて堀尾両家へ相聞候へハ付

将軍家御推聴不宜思召候て若此殊始乎外数輩
御目下御詮儀之上横田内膳儀ハ御上意にも御存之者
之年ニ至り家老職相勤候者ニ被揖令召出首
此くの不行届之節も有之候ニ付候明白ニ不及上候御召の
御尋有之候へ共若し兼而横田之身の上ニ不行届
有之儀共二内膳義御尋之候共は下り上て相続
無之る事は有之候得共任其意者共門之事等を被有之
不実なるてと申事ニ付主殿内膳身之上不都合にて乃
思召と之被仰出候不届と申上候得共重き御詮儀ニ至八

横田候ニハ武功ニ而来家之一党ニも有之ニ付上
公儀江被召候者ニも有之候御老中ニ而差出成
殿江被仰候ニ付何れも中様差図有之候故之義
ニ而も存候ハゞ又ハ差図ニ而も御老中衆江伺可申候
有之候ニ付是ハ存度一統不存寄ニ而取る儀も有之候ハゞ差図
仕候ニ付御中候も如斯三人共ニ而南部仕存置
候ニ付手段も御誅候も右之段を以て三人之者共死罪ニ
被仰付然処前ニ者右ニは何も不構候哉仰上ニ
翌年ニ至御老中ニ而来動之衆取川分内へ入候儀ニ而御

可仕ニ付御免川ニ而奉成借勢居候段ニ付身
身上之儀相果申ニ付又ハ地行之高減ニ而召放
之候御身ニ付江戸中ニ而ハ在所法仕ニ付知行人積
被召有て御免ニ候相成候也

武徳成業巻之四十九終

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan